

女性たちのユートピアにみる教育とキャリア — Herlandの彼方へ

佐々木 真理

1. はじめに

19世紀後半から20世紀の前半にかけて、アメリカ合衆国では多くの女性作家たちが、女性にとっての架空の理想社会を舞台とする作品を発表した。女性参政権運動をはじめとする、アメリカ社会の変革を目指すさまざまな社会改革運動が活発となった時代に発表されたそれらの小説は、女性作家たちが目指すより良き世界の姿を描くことで当時の文化や社会を批判するものであった (Kolmerten 107)¹。女性作家たちは、小説の中で、それまでの社会とは異なる社会や女性の役割、そして来るべき未来のあり方を探り、進むべき道を示そうとしたのである。

注目すべきは、それらのほぼすべての作品において、教育と労働が社会変革の特に大きな鍵となっていることだ²。南北戦争と第1次世界大戦を経験し社会が大きく変化した時代にあって、女性の権利や、女性にとっての理想の生き方を模索した女性作家たちの作品は、教育と労働のどのような変化がユートピア創造の要因たりえると想定したのだろうか。また、女性のキャリアの可能性に関する意識はどのような形で女性たちの間で共有されていたのか、あるいは分断を生み出していたのだろうか。

本稿では、まず当時の白人女性のための女子教育の発展と変容についてその特徴と限界を検証したい。その上で、19世紀後半から20世紀にかけての女性の教育と労働の問題が、Charlotte Perkins Gilmanに代表される白人中産階級の女性たちが執筆したユートピア小説にどのように描かれているの

か、時代によってどのように変容し、あるいは受け継がれているのかを考えていきたい。それによって、彼女たちの理想の特徴と問題点が明らかとなるだろう。そして、それは、女性の教育とキャリアに関する当時の状況について理解を深め、ひいては20世紀から21世紀の現在の状況を問い直す糸口を提示することになるはずである。

2. 19世紀から20世紀にかけての女子高等教育の発展と特徴

19世紀は、白人女性のための高等教育機関の創設が始まり、さまざまな試行錯誤を経て、男性のための高等教育機関とほぼ同等の機関へと徐々に整備されていった時代である。まず、19世紀前半は、Seminaryと呼ばれる女子高等教育機関が相次いで創立された。それらセミナリーの特徴としては、いわゆる家政学という名の元に家事を体系化して女性たちに教えたこと、生理学といった身体に関する分野もカリキュラムに取り入れたこと、健全な身体の育成を目指す体育科目を導入したこと、の3点が大きなものとして挙げられるだろう。

この時期の有名なセミナリーとしては、1821年にEmma Willardによって創設されたTroy Seminary、1828年にCatharine Beecherが創設したHartford Seminary、そしてMary Lyonによって1836年に創設されたMount Holyoke Seminaryの3つが挙げられる。Newcomerによると、これらセミナリーでは、母親として家庭の家事と育児に貢献できること、そして教師として子供の教育に貢献できることが、女性に高等教育の機会を与えるための理由とみなされていた。たしかに、白人女性のための新たな職業として教師という選択肢を提供することにも、これらのセミナリーは貢献していくわけだが、セミナリーを創設した女性の創立者たち、ウィラードやビーチャーは、教師という職業を母親の延長線上にあるものとしてとらえていた点を考えるならば、将来的には女性が家庭で母親として主婦として生きる道を用意していた教育であったとまとめられるだろう。いわば、若い女性たちを家庭へ、主婦へ、母親へとうまく導くのが教育の目標であった。従って、セミ

ナリーでは、代数・幾何・地理・歴史といった科目の他に、家政学という、母親として主婦として必要な知識を培うための科目が用意されることとなったのである³。

また、これらのセミナーでは、身体に関する正しい知識を身につけるための生理学、そして健全な身体の育成を目指すための体育科目も取り入れられていた。ピーチャーもライアンも体操を導入し、ライアンは学生に一日1マイル歩かせていたという。もちろん、これらの教育の目的は、健康な子供を生み育てることができる健全な身体を育成することにあっただ⁴。つまるところ、これら初期の女子教育は、“the society’s claim of the traditional female sphere” (Solomon 25) に従い、家庭という領域へと女性たちをうまく導くためのものであったのである。

そして、時代が移り、19世紀半ばごろから創立が相次いだCollegeでは、家政学に代表される、女性の教育のゴールを家庭とみなすカリキュラムは大幅に減少していくこととなる。1855年に創設のElmira Collegeに始まり、1865年にはVassar College、そして1870年にWellesley College、1871年のSmith College、1885年のBryn Mawr Collegeと、続々と創立されたこれらカレッジの特徴は、ホロウィッツとソロモンによれば、男子大学とほぼ同じカリキュラムを試みている点にある。産業構造の変化と経済成長にあわせて、実質的な女性のための職業の種類が増えてきたということ、そして、女性参政権運動の高まりにともない、さまざまな領域への女性の進出が目指され試みられるようになっていったということがその背景にはある⁵。

このように、セミナーとは違い、カリキュラムの内容が多様化していったカレッジだが、セミナーから受け継いだ要素もあった。それは、健全な身体の育成を目標とする体育科目である。例えば、ウェルズリーにおいては、“We believe the college girl has a right to expect guidance and instruction in the recreative branches of physical training” という信念のもと、“physical training as an aid to the best intellectual activity” が体系的に教育されていた (Hill 12-13)。注目すべきは、このような体育科目の導入の裏には、やはり、健康な子供を生み育てるための身体を女性は持たなくてはならないという思想が

あったということだろう。カリキュラムの内容が多様化し、よりさまざまな職種に対応できるような教育を提供し、女性のキャリアを広げることを目指していたカレッジであったにもかかわらず、結局は女性の生きるべき場として家庭を想定してしまうという矛盾も孕んでいた。

白人女性のための高等教育は、初期は、家庭内の労働を家政学という形で学問化し、女性を優れた教師として、いずれは良き家庭を作る主婦や母親となるための道筋を作ることを目指した。19世紀後半に入ると、社会の変化にあわせて多様な女性の職業に対応できるように、あるいは新たな職業分野を切り開けるような科目が導入されていったが、体育科目と生理学の教育による健全な身体の育成は、女子教育の初期からその後の時代まで受け継がれていった。健全な身体の育成の最終的な目標が、結局は健康な子供を生き育てることができる身体を目指すものであったことを考えるならば、つまるところ、19世紀において、女子教育のカリキュラムは、徐々に男子と同じ教育科目や教育水準を目指すようになったものの、女性たちに用意された道がよりよき母親になるものでしかなかったという問題含みのものであった。白人の中産階級を中心とする女性たちのキャリアあるいは労働の最終的な目標は、よりよき母でしかなかったのである。それでは、このような教育の理想と同時に限界は、その時代に発表されたユートピア小説においてはどのように書き込まれていくことになるのだろうか。

3. ギルマン以前のユートピア小説

ギルマンがユートピア小説 *Herland* (1915) を発表する以前から、アメリカでは複数の女性たちがユートピア小説を発表し、性に関する社会規範からの解放の可能性を探ってきた。ここからは、いくつかギルマン以前に発表されたユートピア小説の中から主なものを時代順に取り上げ、女性のための教育と職業の可能性と限界がどのようにとらえられているかをみていきたい。共通項としてみえてくるのは、職業の可能性を広げるために改革や方策が提示されつつも、母親になることを理想とする当時の教育理念が

忠実に反映されているということだ。

まず、ごく初期の有名な作品として、Mary Griffithの*Three Hundred Years Hence* (1836) が挙げられる。この作品では、職業の機会が均等に与えられる世界が描かれており、“a concrete-lined water system, trains that could travel at thirty miles per hour, inheritance rights for wives, and the guarantee of sewing jobs or vocational training for poor girls” (Kitch 65) と指摘されているように、作品の発表当時、女性の教育や労働にとって不利益と考えられていた仕組みが改善されている様子がかがえる。また、明らかにギルマンに影響を与えたと考えられるものに、Marie Stevens Case Howlandの*Papa's Own Girl* (1874) がある。この世界では、家事労働を共同で行う暮らし方が提案されている。

19世紀後半に入って発表された代表的な作品として、Mary E. Bradley Laneの*Mizora: A Prophecy* (1880-81) がある。この作品は、ヒロインが、女性だけが暮らす世界が地下に存在することを発見するという設定になっている。その世界では、女性たちはあらゆる職業につくことができるようになっているが、職業の中で最も地位が高く、人々の尊敬を集め、高待遇の職業は教職とされている。教育が最も重視されており、すべての教育機関が国によって運営され、無償であり、大学では芸術だけではなく、科学をはじめ機械工学にいたるまでの幅広い分野を学ぶことができる。従って、女性たちの職業も科学者から哲学者、発明家、芸術家、彫刻家と多岐にわたり、女性たちは“notable intellectual acquirements” (123) を備えている。自らの能力に最も適していると思われるどんな職業にもつけるような教育と機会が与えられているという意味において、この世界は、まさに当時のカレッジの女子教育が目指した理想を体現しているといえるだろう。さらには、職業の区別によってもたらされる階級差をなくすことで、女性たちは強い連帯感で結ばれ、ひとつの“vast family” (120) であるような国が作られているのである。

一方で、19世紀の女子教育における重要な目標であった、女性をより良き母親へ育てようという理想もこの小説には反映されている。“Mother is the only important part of all life” (135) であると主張されるこの国においては、

世界の中心となっているのは、母親たちである。母親が子供を育てるときのような愛を持って人を育てる、という教育理念を共有することで、この世界の女性たちはひとつに連帯することが可能となっているのである。いわば、“Charlotte Perkins Gilman’s *Herland* . . . would envision a similarly purified form of heterosexual love and of reproduction” (Jacobs 196) と指摘されているように、後のギルマンのユートピアと理想を共有する世界なのだ。

さて、だがもちろん、ウィラードやピーチャーの教育が、白人の女性たちのためのものでしかなかったように、この *Mizora* でも、優生学的な思想にもとづく選別と排除が書き込まれていることにも注目しておきたい。この国の女性たちはみな肌の白い、金髪碧眼の女性たちであり、美しい容貌を兼ね備えている、ということになっている。“Would not your own land be happier without idiots, without lunatics, without deformity . . . ?” (135) や “We never permitted a convict to have posterity” (136) という言葉からわかるように、この国は、健全な身体と知力を備えていると判断された白人の女性たちにとっては、差別のない理想郷ではあるが、優生学思想にもとづいた基準に満たないものたちは排斥されるという社会でもあるのだ。

The Mizoran woman is the True Woman, the “angel of the house” carried to her logical extreme, still contentedly submissive, but strong in her inner purity and religiosity, queen of her own contained realm, which is really the extension of her home. Pious, intellectual, apparently indifferent to the material world she has apparently designed and built, she is the feminized ideal of Anglo-Saxon racial superiority. (Pfaelzer 147-148)

上記で端的に指摘されているように、*Mizora* の女性たちは、理想の母親像のもとに連帯が可能となっているように書かれているが、その連帯は異なる人種を排除し、多様性を抑圧したものに過ぎないのである。

さらに同時代の作品としては、Alice Ilgenfritz Jones と Ella Merchant による *Unveiling a Parallel: A Romance* (1893) がある。火星に到着した男性が2つ

の異なる都市 (Thursia and Caskia) を訪れ、ジェンダーに関する社会規範の差を体験するという話である。この世界には男性も女性も存在しているが、世界の創世神話から男女が平等であることが描かれているため、男女は完全に平等な存在であるという設定になっている。そのため、女性は高度な教育を受けることができ、多様な職業につくことができるが、前述した *Mizora* と同じく、母親であることや母親としての愛情が、女性にとっても、世界にとっても結局は最も重視される要素となっている。このあたりは、*Mizora* と同じく、家庭性や母親であることに重点をおく、当時の社会的風潮と女子教育の理念が反映しているといえるだろう。しかしながら、結婚によって女性が抱えることになる重荷は当時のアメリカ社会と同じものとして書かれていることから、完全な男女平等な世界が想像されているとはいえない。また、語り手の男性が親しくなる女性は明らかに貴族階級の女性であり、メイドの存在が描かれていることから、階級による差別が存在していることがうかがえる。

その他に、Lois Nichols Waisbrooker による *A Sex Revolution* (1894) もあるが、この作品においても、*Mizora* や *Unveiling a Parallel* と同じく、母親であることが理想化された、母親中心の世界が描かれている。職業において性別による差別がない世界が想定されているにもかかわらず、19世紀に発表されたユートピア小説においては、女性たちの最終的な生きる目的が母であることにつきるかのように描かれている点は、当時の女子教育が内包せざるを得なかった矛盾そのものを表しているといえるだろう。この時期のユートピア小説では、女子教育が目指した理念が反映され、教育によって可能となった女性の職業の多様性と同時に、母であることが理想化され、人種や階級の問題も排除されることで、女性間の多様性は抑圧されていったのである。それでは、ギルマンが1915年に発表したユートピア小説 *Herland* では、その流れはどのように受け継がれているのだろうか。

4. ギルマンにおける女性の教育とキャリアの接続

ギルマンの*Herland*は、それまでにギルマンが発表した著作における彼女の理論、特に*Women and Economics* (1898) で主張されている、女性の経済的独立の重要性と、そのための家事や育児の外注、あるいは社会や共同体で子供を育てるべきだという考えが、女性だけの架空の国を舞台に展開されている小説である。まず注目したいのは、女性の経済的独立のために、女性の生活から家事と育児というケア労働を切り離すという、当時としては急進的な思想を描きつつも、この作品が、19世紀の女子教育の理想と重なり合うような形で、ギルマン以前のユートピア小説において展開された思想を受け継いでいるということだ。

それは、女性の体育教育の重要性である。19世紀の女子教育にとって一貫して重要なものであった健全な身体を育成するべきだ、という理想は*Herland*においても共有されている。例えば、女性たちだけの国に足を踏み入れた3人の白人男性が、初めて“*Herland*”の女性たちと遭遇する場面では、“we saw them fleeing away in the wide open reaches of the forest, and gave chase, but we might as well have chased wild antelopes” (17) とあるように、女性たちの身体能力の高さが表されている。そのような身体能力を育成するために、“for all-around development they had a most excellent system” (32) とあるように、体系的な訓練と教育を行っていることから、“*Herland*”の女性たちが体育教育を重視していたことがよくわかる。これは、まさにセミナーからカレッジへと受け継がれていった思想である。

さて、家事や育児を家庭の中にいる女性一人だけが担うのではなく、共同体や社会が協力して行うべきである、というギルマンの思想は、当時としては先駆的なものであり、前述した*Women and Economics*における中心的な部分である。そして、この思想が、“*Herland*”をたばねる思想の根幹となっているのだ。“*Herland*”の女性たちは、高い教育を受けることができ、多様な職業を選択することができる。家事や育児は、その職業に従事する専門職の女性たちがいるため、女性たちには家庭という概念がない。職業に

よっては、国中を旅してまわるため、ひとつの家に定住し常に同じ人と暮らすこともない。まさに、女性が家庭から解放され、職業の自由と、より広い生き方が可能となった世界なのだ。育児は、育児に関して専門的に学んだ、専門の女性があたることとなっている。このような箇所には、まさに時代を先取りするようなギルマンの思想、育児や母親であることを、本質的なものではなく、習得するものとしてとらえていた思想を読み取ることができるだろう。

戦争も、争いも、競争もなく、すべての女性たちが高い知性と身体能力を備え、民主的な手法で国を動かし、すべての女性たちが幸せに暮らせるように、十分な食べ物と住むところと働く場が与えられる世界。貧富の差も、労働や職業による階級の差もない“Herland”の女性たちの間には強い絆と連帯感がある。だが、ここで注目したいのは、そのように女性たちをひとつにまとめているのが、母親であること、という点だ。“By motherhood they were born and by motherhood they lived---life was, to them, just the long cycle of motherhood” (59) とあるように、すべての女性たちの学び、働く目的は、いかに良い母親として子供をよく育てられるかということなのである。いわば、教育とキャリアをつなぐのは、良い母親になる、という目標なのである。多様な職業を選択することはできるが、それぞれの職業は、結局は、いかに子供がよく育つ社会を作れるか、につながっていく。

この意味で、“her commitment to evolution and the civilizing mission of women indicates an older, nineteenth century intellectual tradition within the women’s movement” (Delap 38) と指摘されているように、*Herland*は極めて19世紀的な、ピーチャー的な母親であることを女性の第一の使命と考える思想を、19世紀の女性たちのユートピア小説と同じく受け継いでいるのである。女性の教育は母というキャリアへと女性たちを導くためのものだという考え方は、その前の時代となら変わりはない。*Herland*は、家庭から女性を解放しようとしたようにみえて、実のところ、家庭を公に拡大し、国全体をひとつの家庭に読み替えてしまったともいえるだろう。“maternal nurturing to be learned rather than innate (at a time when the latter was accepted as truth)”

であることを描いたという点では、ギルマンは先駆的であったわけだが、その子育てを担うことができるのは、あくまでも “particularly appropriate for women (a view more traditional than others she held regarding women’s place in the world)” (Kessler 51) と、女性に限定し、女性の最大の生きる目的としてしまっている点では、ギルマンは極めて保守的でもあったのである⁶。

グリフィスからギルマンへと続く女性たちのユートピア小説は、母であることを、新しい来るべき社会の要とした。すべての女性がすなわち母親であると短絡的に結びつけてしまう彼女たちの作品では、結婚し子供を持つ女性のみが中心であって、例えば結婚をしていない女性たちの存在は、彼女たちのユートピア社会では決して認められることはない。異性あるいは同性と結婚をするかしないか、子供を持つか持たないかといった、多様性に満ちた生き方は、この時代にあっては、もちろん、まだ時代と社会の変化を待たなければならないものであったわけだが、ギルマンはその点では時代の限界を超えることはできなかったといえるだろう⁷。

しかしながら、ひとつ、ギルマンの小説が前の時代の作品とは決定的に異なっているところがある。本質的なものから母親であることを解放しようとしたはずのギルマンが結局は母であることを女性の本質へと還元してしまった*Herland*には、興味深いことに、母親であることによってまとまるべき女性たちの分断も描かれているのである。それは、アメリカ社会から女性たちの国に足を踏み入れた3人の白人男性のうちの一人で、作品の語り手でもあるVanが、さまざまな点において当時のアメリカ社会よりもはるかに優れている国の人々にも、何か欠点があるのではないかと思いをめぐらし、女性たちの国の一人であるSomelに尋ねる場面だ。

“If the girl showing the bad qualities had still the power to appreciate social duty, we appealed to her, by that, to renounce motherhood. Some of the few worst types were, fortunately, unable to reproduce. But if the fault was in a disproportionate egotism---then the girl was sure she had the right to have children, even that hers would be better than others.”

“I can see that,” I said. “And then she would be likely to rear them in the same spirit.”

“That we never allowed,” answered Somel quietly.

“Allowed?” I queried. “Allowed a mother to rear her own children?”

“Certainly not,” said Somel, “unless she was fit for that supreme task.” (82)

ここからわかるのは、実は、良い母親としての性質や能力を持っているか否かに関する選別が女性たちの間で行われている、という事実である。すべての住民たちが母であることを生きる目的としているはずの国にあって、そのような理想を必ずしも共有しないものたちがいるということは、ある意味で女性たちの国の理想の否定につながりかねない。実際、物語でこの事実が語られるのはこの箇所のみなのだが、母であることが無条件に女性をつないでいるわけではなく、女性間の断絶と排除を生み出すものに他ならないことを前景化する部分といえるだろう。つまり、ギルマン以前のユートピア小説においては、女性間の格差や排除を消滅し、すべての女性をひとつにつなぐものとして母であるという要素が機能しているのに対し、*Herland*では、母としての理想が、実は女性たちの間に選別と分断を生み出すものでもある、ということが書き込まれているテキストでもあるのだ。女性の多様性を描くまでにはいたらなかったという意味では、その時代のある意味で限界を抱えているのかもしれない。しかし、母であることが女性たちをまとめる決して唯一の要素ではないことを想定し、女性たちの差異を前景化してしまうこの作品は、後の時代において検討を待たれることとなる、教育がそのまま母という女性のキャリアにつながるものではないという可能性を、ここにおいて初めて示したともいえるのではないだろうか。

5. ギルマン以降

20世紀後半以降も、ギルマンの*Herland*に続くかのように、特に70年代

以降、多くの女性作家たちが女性のユートピアを模索する作品を発表している。代表的なJames Tiptree, Jr.の“Houston, Houston, Do You Read?”(1976)、Joanna Russの*The Female Man*(1977)、Sheri S. Tepperの*The Gate to Women's County*(1988)では、興味深いことに、やはり母であることがひとつの大きなテーマとなっている。だが、そこにはもはやギルマンたちが描いたような、女性だけの美しいユートピアは存在しない。むしろ、ギルマンの提示した問題を極めて皮肉な形で再提示した作品となっているといえるかもしれない。ティプトリー・ジュニアたちの描く未来の世界の様子は、しかしながら、だからこそ、*Herland*が図らずも露呈した、母であることを取り巻く思想が女性の教育とキャリアをつなぐ多様な道を阻害する障害となっている状況が、この時代にあっても同じであることを明らかにしている。

この意味で、ギルマンが提示した問題は、20世紀以降も解決されるのを待ち続けていることは明らかだろう。母であることがすべての女性の共通項として本質化され、それによってすべての女性がひとつにつながっているはずのユートピアに、母の名の元に分断と排除の構造が隠蔽されているという事実を、ギルマンの小説は図らずも書き込んでしまった。*Herland*は、“Gilman raised questions about the politics of maternal responsibility that are still being debated today”(Rich 86)と指摘されているように、いまなお問いかけられ続けている、そして問いかけるべき母の政治学という問題を提示し、教育とキャリアの接続に潜む問題を提示している作品なのである。

*本稿は、第87回日本英文学会全国大会ワークショップ「学校の内と外——イギリス、アメリカ、日本を比較して」(司会・講師 富山太佳夫、志渡岡理恵、佐々木真理、辻吉祥)(2015年5月)における口頭発表を大幅に加筆・修正したものである。

注

- 1 Pfaelzerも同じく、“Utopian novels clearly reflect the social dislocation and dissatisfaction stimulated by women’s new economic and social roles after the Civil War” (141) と指摘し、Kitchも “Reflecting the challenge of societal assumptions by the women’s suffrage campaign, feminist utopian fiction of the period, especially after 1869, often portrayed women not as vengeful revolutionaries but as social reformers seeking as sexually integrated society through the implementation of enlightened social programs.” (65) と論じている。
- 2 例えば、“To correct men’s control of women’s labor and sexuality, feminist eutopias of this period suggest several possibilities: paid work, education, suffrage, and co-operation.” (Kessler 11) と指摘されている。
- 3 Newcomer の特に 5-34、52-71 を参照。
- 4 Horowitz の 25-26、Newcomer の 53-54 を参照。
- 5 Solomon の 43-61、Horowitz の 9-142 を参照。
- 6 ギルマンとビーチャーの思想の類似については、Elbert が詳細に論じている。
- 7 このようなギルマンの思想の限界が、Golden が “Gilman criticism clusters into three periods---first, the “encomium period,” praising her vision for gender equality, suffrage, women and work, professionalized housekeeping services, and community child care; next, the “discontented period,” bringing to the fore Gilman’s repugnant racism, ethnocentrism, and xenophobia; and third, the “mixed legacy” period, examining concomitantly the prejudice and promise of her oeuvre” (44) とまとめているように、ギルマンに対する評価の変容につながっていることはいうまでもないだろう。そして、もちろん、現在のわれわれがギルマンを読むとき、ゴールデンのいう第3段階にあり、“We now recognize that Gilman’s agenda for widespread improvements to liberate women sets her far ahead of her time, but she expressed her reforms through a language laced with prejudices against race, class, religion, and ethnicity, firmly grounding her work in her time and causing problems for reading Gilman as a feminist foremother or even a positive role model” (51) と指摘されているように、ギルマンの思想的な限界を同時代の歴史的背景の中において考えることを忘れてはならない。

引用文献

- Delap, Lucy. *The Feminist Avant-Garde: Transatlantic Encounters of the Early Twentieth Century*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. Print.
- Elbert, Monika. "The Sins of the Mothers and Charlotte Perkins Gilman's Covert Alliance with Catharine Beecher." *Charlotte Perkins Gilman and Her Contemporaries: Literary and Intellectual Contexts*. Ed. Cynthia J. Davis and Denise D. Knight. Tuscaloosa: The U of Alabama P, 2004. 103-126. Print.
- Gilman, Charlotte Perkins. *Herland*. 1915. New York: Pantheon, 1979. Print.
- . *Women and Economics: A Study of the Economic Relation between Men and Women as a Factor in Social Evolution*. 1898. New York: Dover, 1998. Print.
- Golden, Catherine J. "Looking Backward: Rereading Gilman in the Early Twenty-First Century." *Charlotte Perkins Gilman: New Texts, New Contexts*. Ed. Jennifer S. Tuttle and Carol Farley Kessler. Columbus: The Ohio State UP, 2011. 44-65. Print.
- Griffith, Mary. *Three Hundred Years Hence*. 1836. *Daring to Dream: Utopian Stories by United States Women, 1836-1919*. Ed. Carol Farley Kessler. Boston: Pandora Press, 1984. 29-48. Print.
- Hill, Lucille Eaton. "Introduction." *Athletics and Out-Door Sports for Women*. New York: Macmillan, 1903. Print.
- Horowitz, Helen Lefkowitz. *Alma Mater: Design and Experience in the Women's Colleges from Their Nineteenth-Century Beginnings to the 1930s*. Amherst: U of Massachusetts P, 1984. Print.
- Howland, Mary Stevens Case. *Papa's Own Girl*. 1874. *Daring to Dream: Utopian Stories by United States Women, 1836-1919*. Ed. Carol Farley Kessler. Boston: Pandora Press, 1984. 95-103. Print.
- Jacobs, Naomi. "The Frozen Landscape in Women's Utopian and Science Fiction." *Utopian and Science Fiction by Women: Worlds of Difference*. Ed. Jane L. Donawerth and Carol A. Kolmerten. Syracuse: Syracuse UP, 1994. 190-202. Print.
- Jones, Alice Ilgenfriz and Ella Merchant. *Unveiling A Parallel: A Romance*. 1893. *Daring to Dream: Utopian Stories by United States Women, 1836-1919*. Boston: Pandora Press, 1984. 157-175. Print.
- Kessler, Carol Farley. *Daring to Dream: Utopian Stories by United States Women, 1836-1919*. Boston: Pandora Press, 1984. Print.
- Kitch, Sally L. *Higher Ground: From Utopianism to Realism in American Feminist Thought and Theory*. Chicago and London: The U of Chicago P, 2000. Print.
- Kolmerten, Carol A. "Texts and Contexts: American Women Envision Utopia, 1890-1920."

- Utopian and Science Fiction by Women: Worlds of Difference*. Ed. Jane L. Donawerth and Carol A. Kolmerten. Syracuse: Syracuse UP, 1994. 107-125. Print.
- Lane, Mary E. Bradley. *Mizora: A Prophecy*. 1880-81. *Daring to Dream: Utopian Stories by United States Women, 1836-1919*. Ed. Carol Farley Kessler. Boston: Pandora Press, 1984. 117-37. Print.
- Newcomer, Mabel. *A Century of Higher Education for American Women*. New York: Harper, 1959. Print.
- Pfaelzer, Jean. *The Utopian Novel in America 1886-1896: The Politics of Form*. Pittsburgh, U of Pittsburgh Press, 1984. Print.
- Rich, Charlotte J. “An ‘Absent Mother’: Charlotte Perkins Gilman, *Mag---Marjorie*, and the Politics of Maternal Responsibility.” *Charlotte Perkins Gilman: New Texts, New Contexts*. Ed. Jennifer S. Tuttle and Carol Farley Kessler. Columbus: The Ohio State UP, 2011. 85-102. Print.
- Russ, Joanna. *The Female Man*. Boston: Beacon Press, 1975. Print.
- Solomon, Barbara Miller. *In the Company of Educated Women*. New Haven: Yale UP, 1985. Print.
- Tepper, Sheri S. *The Gate to Women’s Country*. London: Orion Publishing, 1988. Print.
- Tiptree, James Jr. “Houston, Houston, Do You Read?” *Star Songs of an Old Primate*. New York: Del Rey, 1978. Print.
- Waisbrooker, Lois. *A Sex Revolution*. 1894. Philadelphia: New Society Publishers, 1985. Print.